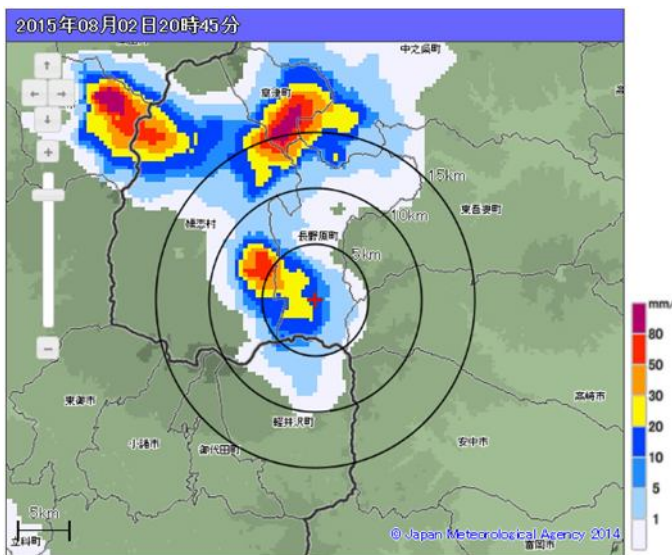


## 「雷を観る・撮る (2)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

雷の写真で、最も劇的なシーンは、落雷の一瞬であろう。しかし、この一瞬を撮影することは、実に容易ではない。

まずは、雷の母体である「優勢な積乱雲」が、被写体としてふさわしい距離に存在しなければいけない。積乱雲の真下に入ってしまったら、雷は被写体ではなく、危険な存在となる。特に三脚を立てて、雷を狙っている者など、「はいどうぞ自分に落雷してください。」と頼んでいるようなものだ。観察者と積乱雲(雷雲)との距離は、10km程度離れていて、現在地には降雨がないことが望ましい。8月2日の浅間高原は、そのような条件に合致していた。



上図は、8月2日20:45の高解像度ナウキャスト(気象庁)である。浅間山北方の長野原町全域と嬭恋村北部に、列積乱雲が発達している。この時、嬭恋村の南西部にいれば、積乱雲から落雷(雲底と、地面または地上物の間に放電する現象)の様子を観察できる可能性が高いことになる。

雷の音(雷鳴)は写真には写らない。しかし、電光(稲妻)と自分との距離の目安を知るには適している。ピカッと光って3秒後に雷鳴が来れば、自分と稲妻の距離は、およそ1kmである。この距離だと、撮影はかなり危険だ。10km以上離れていると、通常は電光のみが見えて、雷鳴は届かない。ピカッと光って、ゴロゴロと聞こえないのは、それはそれで不気味である。

こうした好条件の撮影は、めったにないチャンスだが、次に難しいのが、カメラのさまざまな設定である。雷はいつ落ちるかわからない。落ちた瞬間にシャッターボタンを押しても、大抵は手遅れである。いつ落雷があってもいいように、カメラのシャッターは解放(バルブモード)にしておく必要がある。その際、街明り、月の有無や月齢、電光の強さなどのさまざまな条件を考えて、露出を調整する必要がある。



たとえば上の写真は、ISO(感度)1600、f(絞り)解放(1.4)、30秒露光で、積乱雲を撮影したものだ。確かに落雷の一瞬をとらえたものだが、露出オーバーで、稲妻の周囲が真っ白に飛んでしまっている。



今度は、同じ位置から、露出をずっと落として撮ってみた。f=25という、通常の風景撮影では使わない絞りである。うまく稲妻が写った。しかし、28mmと広角な為、いささか迫力に欠ける。これを中望遠で撮影したら、迫力のある画像になるだろう。(つづく)